special issue

講演録：公開講演会「世界に声なきものはいない、その声を聞けないものがいるだけだ」

——高秉權さん（『黙々』著者）を迎えて障害と哲学、移動と収容を語りなおす

影本　剛、瀬戸徐映里奈、松谷実のり、高秉權、渡邉　琢、北川眞也

はじめに

影本　剛、瀬戸徐映里奈、松谷実のり

同志社大学都市共生研究センター・グローバル地中海地域研究同志社拠点「移民・エスニシティ」研究班では、2024年8月1日、同志社大学今出川キャンパス良心館RY101教室において、「「世界に声なきものはいない、その声を聞けないものがいるだけだ」——高秉權（コ・ビョングォン）さん（『黙々』著者）を迎えて障害と哲学、移動と収容を語りなおす」という企画を開催した。平日にもかかわらず60人余りの人びとが集った。これはその記録である。

2023年末に、高秉權『黙々——聞かれなかった声とともに歩く哲学』（影本剛訳、明石書店）の日本語訳が刊行されて以後、高秉權の議論を日本で改めて考えるために、私たちは本書のエッセンスから「脱収容」と「移動」というキーワードを読みとった。日本でも2016年7月26日に知的障害者施設「津久井やまゆり園」にて19人の入所者が元職員に虐殺される事件が起こり、さらに2021年3月6日には非正規滞在者となった元スリランカ人留学生女性のウィシュマ・サンダマリさんが名古屋入国管理局の収容施設で亡くなる事件が起こった。ある人たちを社会に不要のものとみなし一方的に施設に押し込め、その尊厳のみならず命さえ奪う暴力が続く現在、高秉權さんが投げかけた問いは日本においても重要な響きを持っている。そこで、京都で障害者自立生活運動に関わる渡邉琢さん（日本自立生活センター）と、イタリアを中心に地中海を移動し、収容に抗う人びとの生を描いた『アンチ・ジオポリティクス——資本と国家に抗う移動の地理学』（青土社、2024年）を発表した北川眞也さん（三重大学）を評者として招いた。『黙々』を韓国の文脈に沿って厳密に読解するのも一つの読書法であるが、日本で活動・研究する人びとの現場に接続することで、生きる力を刺激する『黙々』の潜在性を明らかにすることも、私たちの役割だと考えるからだ。

そして本記録を読んでいただけると分かるように、本企画は、『黙々』を成果物としてみなすのではなく、そこから新たな可能性を見出すものとなった。新たに重要性を位置づけなおすことで現れる潜在性を示せたことは、翻訳書籍による原著への貢献であると考える。

講演企画の準備、そして当日の段取りを支えてくれた同志社大学都市共生研究センターの森千香子、保井啓志、キム･ハンナ、大川原拓真の各氏、当日の通訳を担った姜文姫、影本剛、手話通訳を担った京都市聴覚言語障害センターの皆様に感謝申し上げる。

高秉權、渡邉琢、北川眞也の各氏には掲載用の原稿を用意していただいた。高秉權の講演の翻訳・質疑応答の整理は影本剛が行った。なお、『黙々』の続編といえる高秉權『人を目撃した人』の日本語訳（影本剛訳）が 2025 年に刊行予定である。

聞かれない音と耳を傾けることについて

高秉權
（コ・ビョングォン）
影本　　剛　訳

1.

招待してくださりありがとうございます。今回の行事を準備してくださった同志社大学都市共生研究センターのみなさまに感謝申し上げます。障害学を勉強しはじめてから､「共生」がわたしたちの生の「志向」である以前に、わたしたちの生を可能にする「前提」であることが分かりました。一人で生きることのできる人は誰もいません。いまわたしがこの場所にいられることも、数えることのできない多くの方たちのサポートのおかげです。自立的な生とは依存なき生ではありません。むしろたがいによく依存することをもってのみ、わたしたちは自分だけの独特な生を生きていくことができます。わたしたちは皆「ともにあることのおかげで」生きていけるのです。そしてわたしたちが「ともにあることのおかげで」生きているということは、わたしたちが「ともにあること」から贈り物を受けとったということ、あるいは「ともにあること」に対して負債があるという意味です（コミューン commune の意味がこれです）。したがってわたしたちには「ともにあること」に対して応える責務があると考えます。

たがいの関係を耕し、ケアをする責務のことです。いまこの場所でわたしが語る言葉をこの場への招待に対する応えにするには限りなく不十分なものなので、口に出すことすら恥ずかしいものですが、それでもせっかく準備してきたものなので、お話しさせていただきます。

今日わたしは「黙々」についてお話ししたいと思います。しかし「黙々」についていったいどのようなことを話せるでしょうか。この二文字についてなにかを語ることは本当に難しいのです。本のプロローグでわたしは「沈黙が音を発し、空席が姿を見せる」と書きました。だれもが知っているように沈黙からは音が出ませんし、空席にはなにも見当たりません。しかしわたしは沈黙や空席を単なる「無」だとか「無いこと」だとは考えません。むしろその反対です。沈黙は声との緊密な関係のなかにおいて沈黙であり、空席は席との関係のなかにおいて空席であるからですね。沈黙と言いながら、わたしたちはずっと前から声を心のなかに持っていますし、空席と言いながらもずっと前から席を、席にあった／いた、あるいは席にある／いるであろう存在を心のなかに持っています。ですから沈黙と空席にはすでになにかが在るのです。わたしたちの沈黙と空席は記憶と期待、哀悼と歓待のなかにあるのです。

沈黙の様相は多様ですが、きょうお話しする沈黙はまさにこのような沈黙です。声以前に存在する沈黙、ただ音なき状態としてではなく、声に対するなんらかの待機、なんらかの準備としての沈黙です。沈黙が「声に対する待機」であるならば、それは「耳を傾けること」と呼んでもよいでしょう。沈黙が声を発するならば、こんなふうに言うのではないでしょうか。「しっ、耳を傾けろ、声が聞こえてくる」。はじめに言葉ありきという表現がありますが、それよりも先に耳を傾けることがあったでしょう。こう言いなおすほうがよいでしょう。言葉以前に「語ろうとすること」を見ぬいた「聞こうとすること」があった、と。

『黙々』の日本語版の副題が「聞かれなかった声とともに歩む哲学」です。今日わたしがお話ししたいことは、この副題のように「聞かれなかった声とともに行う」ことについてです。つまり「耳を傾けること」についての話だと言えます。二人の人間についての話です。一人はわたし自身の話です。耳に手をそえて語ってくれた人の声すら聞きとれなかったわたし自身の恥ずかしい過去の話です。そしてもう一人はわたし自身が最近ある人をよく思いうかべるのですが、聞くことに対して必死になるその人の話です。

2.

まずわたしがどのように『黙々』に収録された文章を書くことになったのかからはじめましょう。『黙々』は韓国で 2018 年に出版されたのですが、原稿自体はその 5 年前から書いてきたものです。「スユノモ」

という研究者共同体から離れ、ノドゥル障害者夜間学校（ノドゥル夜学）で過ごすなかで書いたものです。「スユノモ」の人たちはわたしを「酋長」〔韓国語発音はチュジャン〕と呼びました。わたしの姓が「高」なので「高酋長（コ・チュジャン）」〔調味料のコチュジャンと同音〕でした。酋長は語りに長けていなければならない人です。共同体の中であれ外であれ、話す機会がほんとうに多いのです。それでも共同体で仲間たちと話す時、なにかを厳粛な、あるいは悲壮なかたちで話すことはほとんどありませんでした（初めの頃はほんとうにそうだったのです）。わたしがそのように話したとしたら皆は「あいつどうかしたのか？」と爆笑したでしょう。スユノモは本当に笑いにあふれ、きまりが悪いほど笑い声が大きかった共同体です。

ところが2006年、スユノモの人びとが「大長征」と呼ぶ事件以降、言葉の性格が少しずつ変わりはじめたと思います（ある意味ではその前からかも知れません。大長征とは無関係の重々しい言葉がその頃に多くなったと思います）。当時韓国社会を騒がせていた事件がたくさんありました。人びとの強い反対にもかかわらず「セマングム」という大規模干拓事業が強行され、〔ソウルの南の〕ピョンテクでは農民たちを追い出して大規模米軍基地が建設されており、その年には米国との自由貿易協定が推進されました。このすべてが同時に起こったんですね。韓国社会が騒がしくなりました。スユノモの人びともそうでした。あるだれかはセマングムの偽善とそれがもたらす生態系の災難に憤り、別のだれかは年老いた農夫を追い出して大規模米軍基地が建設されることに怒り、また別のだれかは自由貿易協定について心配しました。

そのとき、わたしたちのなかのだれかが共同体の外に出て人びとと会って話を交わしてみようと提案しました。そのようにしていわゆる「大長征」というものが組織されました。〔韓国南西部の〕全羅（チョルラ）北道のセマングム地域からソウルまで、400キロあまりを二週間ほど歩きながら、それぞれの地域の住民たちと毎晩話を交わすことにしました。形式は住民たちの話を聞こうというものでしたが、わたしたちには「啓蒙主義的」態度がある程度あったのだと思います。わたしたちは「話したい」人びとでした。わたしたちはさまざまなテーマについてさまざまな本と論文を読んできた人たちだったからです（今から思うと本当に恥ずかしく思います）。

当時、酋長であるわたしに与えられた任務は宣言文でした。このときから宣言文を本当にたくさん書きました。大長征を提案しながら「マイノリティ闘争宣言文」というものを書きましたし、大長征をはじめるときは「歩きながら問う」という題名の宣言文を、そして本を読んで社会問題に介入しようと市民読書ネットワークを組織して「本を読もう、世の中を変えよう」という宣言文を、さらには「大衆知性宣言文」を、

「コミューン主義宣言」というものも書きました。

世の中に対する発言を本当にたくさん行いました。そして本当にたくさんの人びとに会いました。大長征の過程で漁師や農民たちに会ったのをはじめとし、2 ～ 3 年にわたり、あちこちで様々な人に会いました。移住労働者たち、非正規労働者たち、性労働者たち、刑務所在所者たちに会い、また障害者たちに会いました（余談ですが、そのときは情報課の刑事がそばにいました。その刑事が、「理解できない」というように、わたしに対して「いったいなんでそうするのか」と聞いてきたことを思い出します。いくら考えても「スユノモ」が運動団体のように見えなかったようです）。『黙々』に収められたかなりの部分を占めるノドゥル障害者夜学との縁もこのようにはじまったのです。わたしは大学の外で人文学を勉強する研究者たちの共同体にいましたが、人文学は大学だけでなく共同体の中にも閉じこめられてはならないと考えていたのだと思います。共同体の外で、路上で、現場で人びとともに勉強しなければならないと考えました（いま振りかえってみれば、大学とスユノモの距離は当時のわたしたちが考えていたよりも近く、スユノモと現場／路上の距離はわたしたちが考えていたよりも遠かったように思います）。当時、路上で学ばなければならないという言葉を本当にたくさん言いました。しかし実際に行なったことを思えば「学ぶ」ということ以上に「教えようと」したのだと思います。あちこちで人文学の講義をして、世の中についてあれこれまくし立てたのです。

ところで『黙々』はこのようにたくさんの言葉をまくしたててきたわたしの失敗の記録、恥に対する記録だと言うことができます。大長征をはじめてからすぐの時期に書いたエッセイ『高酋長、本で世の中を語る』と、その 10 年後に出版した『黙々』は題名からして対比できます。2007 年の本が「語る」であれば、2018 年の本は「黙々」です。『黙々』に収められた文章は、もちろん韓国の障害者たちの現実と運動を知らせる目的で書いたものですが、その根底にはわたし自身の失敗と学びが下敷きになっています。

3.

昔話であまりにも遠回りをしてしまいました。わたしが遅ればせながらに知ることになった、わたしの最も大きな失敗はまさに「聞くこと」です。わたしは聞くことにあまりにも拙かったのです。わたしの悩みは主に「どのように語るか」にありました。「どのように聞くか」に対する悩みは大きくありませんでした。ところが障害者夜学でわたしはわたしの語りが聞くこととどれほど乖離しているのか、それだけでなくわたしのように聞くことができない者、聞かない者の言葉がどれほど無責任なのかを実感しました。「責任（responsibility）」とは「応答（response）」を「することができる

(ability)」であるならば、わたしは本当に無責任な人だと思うことになったのです。わたしの言葉はただの言葉に近かったのです。応答ではなく、です。

わたしがノドゥル夜学に最初に来たのは2008年です。ここでスユノモの仲間たちと一カ月に一度ずつ人文学の特講を行いました。しかしこのときはこの問題があまり表面化しませんでした。多くの非障害者の活動家たちが障害者の学生たちに交じって講義を聞き、呼応をしてくれたからです。

ところが2010年、はじめて正規授業を担当したとき、問題が明らかになりました。初回授業の時、教室に入ると、十数名の学生たちが座っていました。ほとんどが脳性まひの障害者たちでした。授業を開始して少し経ったとき、ある学生がなにかの話をしたのですが聞き取れませんでした。とても困惑しました。体をよじって大変そうに、あたかも子どもを産むように、一言ずつ吐き出しているのに、なにを言っているのか聞き取ることができませんでした。その瞬間、とても慌てました。ちょっとなにを言っているのかだれか代わりに話してくれないかと他の学生に尋ねたのですが、その次はその学生の話も聞き取ることができませんでした。

いまでも恥ずかしくてただただ隠したい残酷なことをそのとき犯したのです。ある学生がなにかを言っているのに聞き取ることができませんでした。だから耳をぐっと寄せてもう一度言ってくれとお願いしました。ところがその次も聞き取ることができませんでした。その学生がもう一度言いました。時間は流れつづけ、わたしは依然として聞き取ることができませんでした。もう一度言ってもらっても聞き取る自信がありませんでした。しかしその学生がもう一度同じ言葉を大変そうに吐き出しました。わたしはどうにかしてその状況を逃れたかったのです。その学期、わたしはニーチェの『ツァラトゥストラはかく語り』の第一部を読む授業を行う予定でした。ニーチェの哲学に対するあれこれを話した後でした。その学生が「ニーチェ」と言ったようであり、わたしが紹介したニーチェの哲学に対して自分の意見を言っているようでした。ところがどうしても聞き取ることができませんでした。あちこちで学生たちが同時になにかを言っているのですが、わたしの頭はいきなり真っ白になりました。その時、ただその学生の話を聞き取れたふりをしてしまいました。「はい、そうだと思いますよ」。その学生の考えに同意すれば大丈夫だろう、そんな考えだったんでしょう。

なぜほかの教師にサポートを頼もうと思わなかったのか、なぜ授業後に話をしようと言わなかったのか、なぜわたしが聞き取ることができないと告白しなかったのかいまはわかりません。じっさいその時その学生が言った言葉は「ニーチェはどこの国の人ですか？」だったといいます。学生たちは口を閉ざしました。発声障害を持った学生たちは確かに多かったのですが、何より

もわたしの偽善を見たからです。聞くことができない者、聞かない者が聞いたふりをすることです。学生の一人二人が呼応をしてくれしましたが、おおよそ授業時間にわたし一人だけが話しました。わたしが書いてきた文章を画面に映しながら、大声で読み、解説し、また読むというふうに授業を終えました。授業時間に響きわたる声は、わたしの声だけでした。わたしはわたしが話すことだけを聞きました。

ひと月ほど過ぎたころ、授業を放棄しようとしました。こんなやり方では授業を行うことはできないと考えたからです。ところが驚くべきことに『ツァラトゥストラはかく語り』のいくつかのフレーズが学生たちの心に届いたことで、学生たちがふたたび言葉の門を開きました。学生たちはわたしを放棄しませんでした（放棄というものは他の選択肢がある時の話なのかも知れません。学生たちはカフカの「赤いペーター」のように、どのようにしてであれ「出口」を探さなければならなかったからです）。学生たちはずっと何度も繰りかえし話してくれました。そのような努力のおかげで、神妙なことにもわたしもだんだんと学生たちの言葉を聞き取れるようになりました。

後に余裕ができてからわかったのです。声を発せなかった学生も文字盤を利用できましたし、表情や手ぶり、目線でもかなり多くの意思を表現するということをです（いまではAAC〔Augmentative and Alternative Communication：拡大代替コミュニケーション〕があるので、さらに円滑ですが）。騒音のデシベルは上昇しませんでしたが、学期を終える時には活気に満ちた授業、こういってよければ本当にやかましい授業になりました。わたしもずいぶん人気講師になっていたんです。学期を終えた後の飲み会の場で、ある学生が話しました。最初はわたしがとても嫌だったと、もっといえばわたしが明るく笑うことも嫌だったと。自分たちが気分の悪い言葉を言ってもにこにこ笑うのが虚飾に見えたそうです。これからは怒りが湧けば怒れと言われました。そうです。聞かない人は明るく笑うことも暴力ですが、よく聞く人であれば怒ることも友情でありうるのです。その人は応答する人だからです。

4.

果たしてちゃんと聞くということは何でしょうか。最近わたしはこの社会がどれほど聞かない社会、聞こうとしない社会なのか、ふたたび実感しました。ノドゥル夜学が30周年を迎えるので、校長先生のインタビューをし、その文章を書くことになったのです。現在のキム・ミョンハク校長はノドゥル夜学に通って30年目になる学生でもあります（学生が校長なわけです）。電動車いすを利用する身体障害者でもあります。ひときわ静かに話す方でもあり、発音する際に若干音が短く途切れるように感じます。ともに過ごす人びとは大して感じとれない程度です。わたしはこの方に二度

にわたってインタビューをしながら、韓国の大型ポータル会社である「ネイバー」が提供する「クローバーノート」という録音記録用アプリケーションを利用しました。音声を文字化するアプリなのですが、その正確度はほんとうに驚くべきものでした。

ところが、クローバーノートで文字起こしした記録を参照しながら文章を書いていて本当に驚いたのです。校長先生が語らないであろう言葉がかなりたくさんあったからです。わたしが聞いたことのない言葉でした。そこで録音ファイルを直接聞いてみました。言葉が歪曲されていたのです。人工知能（AI）の技術が搭載されたアプリは自分が聞き取れなかったことを正直に表現しませんでした。まともに聞くことができなかっただけでなく、それをめちゃくちゃな文章へと変換していました。15 年前にわたしが行った残酷なふるまいを平然とやってのけたわけです。

なぜこのようなことが起こるのかは想像がつきます。人工知能（AI）が学習したサンプルはすべて非障害者の音声であっただろうからです。そうであれば障害者の音声をさらに学習すれば問題が解決できるでしょうか。わたしはそう考えません。統計的に接近すること、平均的に接近すること、大数の法則にしたがうことでは答えになりません。障害とは同一ななにかではありません。そのように接近してはなりません。障害は虚構的な同一性です。このように言ってもよいでしょう。「障害者」とはいわゆる「健常者」という太陽があることを信じさせるためにつくりだした影のようなものである、そして「健常者」はその影を通してつくられた影、虚構的同一性を通して作られた虚構的同一性である、と。

19 世紀以降、わたしたちは標準から抜けだした多様な諸身体を一つの名前、つまり「障害（disability）」という言葉でひとまとめにしていますが、身体障害者と精神障害者はあまりにも異なり、身体障害者だといっても肢体障害者と脳性まひ者、感覚障害者（聴覚障害者、視覚障害者など）があまりにも異なり、精神障害者と発達障害者も完全に異なります。わたしたちの夜学の人びとは少なくとも 15 個の完全に異なる部族たちが暮らしていると語ります（韓国障害者福祉法に分類された基本障害類型は 15 個です）。生の条件や様式（mode）において障害者どうしの差異（たとえば視覚障害者と聴覚障害者の差異）が障害者と非障害者の差異よりもさらに大きいと言うべきかもしれません。したがってノドゥル夜学でわたしたちは、いかなる同一性に対する確認なしに、ともに生きていく方法を分かっていかなければならないと、あるいはともに生きていく方法をつくらなければならないと話します。

わたしがノドゥル夜学で学んだものは、クローバーノートとまったく異なる倫理でたがいに近づいていかなければならないというものです。だれかの言葉を聞き取りたいなら、他のだれとも異なるまさにその人

に「注意を向けなければ」なりません。その人の発声と身振りを理解しなくてはならず、さらにはその人の日常、活動、欲望、人生、困りごとに注意を向けなければなりません。なんらかの準備、なんらかの待機が必要なのです。そしてその準備と待機は他のだれとも異なる当事者に合わせられなければなりません。多数や平均ではなく固有の差異、特異性（singularity）に注目しなければなりません。「その人の言葉」を待つ人だけが「その人の言葉」を聞くことができます。

クローバーノートというアプリが文字起こしに失敗したこと、さらには文章を歪曲したことは、非障害者中心主義（ableism）社会の平均的人間、いわば非障害者の言葉を期待していたからです。障害者の声に対してこの社会が聞くことができないこと、聞こうとしないことが技術的に内蔵されていたのです。非障害者中心主義社会において障害者の声は関心のもたれない声、期待しない声、待機しない声、喜ばれない声なのです。それゆえにそれは聞こえない声であったり歪曲を通してのみ伝達される声なのです。

5.

この防音壁をどのように壊せるでしょうか。この防音壁を穿ってわたしたちがなにかを聞くことができるでしょうか。最近わたしは19年前の必死になったある聞きとりをよく思いうかべます。1995年、ある障害者がソウルのソチョ区役所で焼身自殺をしました。韓国の障害者運動史においてとても重要な事件です。チェ・ジョンファンという障害者の物語です。かれは露店を営む貧しい障害者でした。音楽を違法にコピーしたカセットテープを売っていました。ある日､区役所の取締り班につかまり、物品をすべて奪われました。かれは区役所に訪ねていき比較的高価な物品であるスピーカーとバッテリーだけでも返してくれと言いました。ところがそこで自分の障害を嘲る言葉を聞いたようです。あまりの怒りに、その夜、だれもいない区役所の前庭で焼身しました。区役所を見回りしていた職員が発見して病院に移送されましたが遅かったのです。10日ほど延命をしましたが、結局は息を引き取りました。

ところがチェ・ジョンファンが息を引き取る前に、かれに面会して遺言を聞いた人がいます。全国露天商連合会の活動家のユヒです[1]。ユヒもまた取締りに追われながら露店をしていた人です。ユヒは仲間とともに病院でチェ・ジョンファンと面会しました。真っ黒に燃えた人が死の境をさまよっているのを見ました。その夜、ユヒは悪夢にさいなまれたといいます。チェ・ジョンファンが怨鬼のように近づいてくる夢。ユヒはその怨鬼に一生さいなまれるみたいだったと言います。だからもう一度チェ・

1 この日の状況についてのユヒの証言は次の本に掲載されている。ホン・ウンジョン『わたしは動物』春の日の本、2023、135 - 9頁。

ジョンファンを訪ねていきました。今回は録音機を持っていきました。夢に怨鬼のように現れた人の言葉を録音するためにです。チェ・ジョンファンはユヒにどのような言葉を残したでしょうか。この遺言は当時大きな波紋を呼びおこし、現在に至るまで韓国障害者運動の精神に深く刻まれています。かれが残した言葉は「復讐してくれ」です。

ところでユヒは本当にチェ・ジョンファンの声を聞いたのでしょうか。顔の肉が割け、くちびるが裏返しになった人、すでに気道まで切開した人からどのような音が発せられるでしょうか。人びとは疑いました。チェ・ジョンファンは声を出すことができない人だったからです。ところがユヒは明らかに聞いたと言います。ユヒはこのように言いました。いったいなぜそんな大変なことをしたのかと聞いたところ、チェ・ジョンファンが「オ、オ、オ……」と言いながらなにかを話そうとしたというのです。だから思っていることを当てるゲームをするように尋ねつづけたのです。一つの単語を投げかけてみて、また別の単語を投げかけてみて、なにを言いたいのかを聞き取るために必死だったのです。そうしているとチェ・ジョンファンがくちびるに力を入れて口をすぼめるようしたかたちが「復讐」という言葉のようだったというのです。「復讐？　復讐してくれって？　」と言うと、チェ・ジョンファンが「オ、オ……」と答え、ユヒは自分の理解が合っていればまばたきをしてくれと言ったといいます。そうするとチェ・ジョンファンが力のかぎり目をつむり、そして開いたといいます。もちろんこれはユヒだけが知る話です。

わたしはユヒの録音機を思いうかべてみます。そこには何が録音されているでしょうか。おそらくユヒがひとりで叫ぶ声だけが入っているでしょう。しかしそれだけではありません。そこには激烈な沈黙が録音されています。ユヒの言葉とチェ・ジョンファンの言葉のあいだの激烈な沈黙。そしてまったく聞き取れない音、音の出ない音が響きわたっています。復讐してくれ。ユヒはどのようにこの言葉を聞き取ることができたのでしょうか。それは必死に聞こうとしたからです。それは怨鬼になるような人の言葉だったからです。ユヒは録音機を準備しました。しかし録音機ではとらえることのできない言葉を聞いたのです。くちびるをすぼめて発音される無数の単語のなかで「復讐」を思いうかべたのは、おそらく真っ黒に焼けたチェ・ジョンファンの姿を見てユヒ自身の心のなかに浮かんだ言葉であったからでしょう。そのような生を生きた人であったから、そのような生を生きた人の言葉が聞こえたのでしょう。それはチェ・ジョンファンの言葉であるとともにユヒの言葉でした。

一人が必死にくちびるをすぼめて吹きだした風の音と、その音を聞き取りたくて顔を寄せるもう一人。その日の病室を思いうかべるたびに、聞くということは、聞こえ

ない声を聞くということは、なんであろうかといつも考えることになるのです。ある意味では聞くということはだれかの言葉とわたしのなかの言葉が出会う出来事ではないでしょうか。わたしの言葉がその人の言葉に向かって必死に跳躍すること、それが聞くことではないでしょうか。その人の言葉が到来し、わたしの言葉が出迎えにいくのです。わたしの言葉がその人の言葉を迎えるために行くこと、それが「耳を傾ける」という言葉の意味ではないかと思います。

関連して、韓国障害者運動の現在的な歴史とでもいいましょうか、韓国障害者運動の分岐点にユヒが聞いたチェ・ジョンファンの遺言があります。1990年代中盤、韓国の民衆運動は急激に衰退しました。そして洗練された市民運動が始まりました。過激な闘争を遠ざけ、市民の応援を受けて政策を開発し、議会に立法のためのロビー活動をする団体が増えました。障害者運動もそうでした。ほとんどがエリート障害者たちが率いる市民団体に吸収統合されました。ところが少数の障害者グループがチェ・ジョンファンの葬儀を行うなかでかれの遺言を掴みとったのです。かれらはさらに貧しい障害者、さらに重度の障害者たちを主体化しました。貧しくて学ぶことのできなかったある露天商の障害者が燃えたくちびるをすぼめて力の限り吐きだした風の音である「復讐してくれ」を掴みとったのです。2001年、地下鉄の線路を占拠し、障害者の移動権の保障を要求して以来、23年にわたり熾烈に闘っている障害運動家たちは、非障害者中心の韓国社会に、いま長い復讐をしているところなのです。いまや韓国社会は障害者たちの前で嫌悪を隠したまま明るい微笑をうかべることを、もはやできなくなったのです。ご清聴ありがとうございました。

『黙々』と日本の障害者運動
――「聞かれなかった声」の展開－

渡邉　琢

こんにちは。渡邉琢といいます。京都市南区にある日本自立生活センター、通称JCILという障害者団体で働いています。韓国で高さんが関わっているノドゥル夜学と同じ志をもつ団体だと思います。ぼく自身も日本でバリアフリーを求める運動（移動権闘争）や脱施設の運動に関わっており、それがライフワークともなっています。

韓国の障害者運動とも断片的な交流があり、2016年には高さんの所属するノドゥル夜学、ノドゥル障害者自立生活センターに訪問したこともあります。『黙々』の中で、地下鉄光化門駅構内での座り込み闘争のことが触れられていますが（高 2023: 103）、その座り込み現場にも2015年と2016年に訪れました。2017年12月にも行ってみたのですが、そのときは、すでに保健福祉省の大臣が障害者施策を施設収容から脱施設に転換するなどの「約束」をしたあとで、すでにテント闘争の拠点はなくなっており、座り込みの現場には「工事中」の張り紙があったのを覚えています。

だから、『黙々』を読みながら、当時出会った人たちのことや、韓国の障害者の苦難の歴史を思い浮かべていました。今、その当時の大臣の脱施設の「約束」がどの程度履行されているかには関心があります。

それと同時に、高さんが、研究者・知識人として、その立場に限界を感じ、次第に障害者運動に近づいていったことにも興味を覚えました。ぼく自身も、大学で勉強していたのですが、どうしても大学内に飛び交う言説に空虚な感じを抱いており、障害者の生きざまに触れることではじめて、人の「声」、生きた「声」を聞くことができたと思ったからです。

また、『黙々』の中で、スユノモの崩壊過程において「正しい言葉」が専制支配するようになったという箇所にも注意が向きました（Ibid: 24-33）。この本自体、序言にある通り「今ほど確信がなかった時はない」という感覚の中で書かれています (Ibid: 1)。運動の確固となる目的や理想が見えない中で書かれた文章です。この本の文脈とは異なりますが、「聞かれなかった声」から育ってきた日本の障害者運動自身も、その声がだんだんとかたちになっていくとき、いつのまにか「正しい言葉」が強くなり、他者の声を聞けなくなることもあると思っています。今、日本の障害者運動は、自分たちが他者の声を聞けているかという反省の中で進んでいる面があるように思います。ぼく自身も、実際の運動と自立生活支援の現場にいる中で、運動の正義の言葉だけでは到底通用しない現実にぶつかり、日々悩みの中にいます。つまり、これまで「聞かれなかった声」自身が、運動の進捗の中で自問自答しつつ、反省的に（reflexively）、展開、更新していっている面があるように思っています。そのあたりのことを以下、

話していきたいと思います。

さて、まず簡単にぼくがどのようにして障害者運動に関わるようになり、今どんな活動をしているのか、お話ししたいと思います。

ぼく自身は、1975年生まれ。いろいろと人生に悩み、哲学を勉強したくなり、2000年に京都大学の大学院に入りました。そのときは、意味もわからず、文字だけをおった勉強をしていました。大学の哲学の先生や先輩の話が、人のうわさ話や大学ポストの話ばかりで、なんだかなぁと思っていました。マックス・ウェーバーが『職業としての学問』の中でトルストイを引用しながら、学問とは「無意味な存在である、なぜならそれはわれわれにとってもっとも大切な問題、すなわちわれわれはなにをなすべきか、いかにわれわれは生きるべきか、にたいしてなにごとをも答えないからである」と言っていた通りに（ウェーバー1980: 42-43）、大学の中では学問と生が結びついていないと感じていました。

同じころ、ここ京都のJCILで介助者（韓国では활동보조인（活動補助人）と呼ばれています）のバイトをはじめていました。当時はまだ障害者を取り巻く環境は整っておらず、地域で自立生活している人たちも、こういうのもなんですが、薄汚く、世間からはだいぶ異質な存在でした。でも、そこには生きるエネルギーがはじけていました。そして、巧言令色がまかり通る健常者の世界とは違い、生（なま）の言葉がここでは聞かれました。生（なま）の言葉というのは、生（せい）の言葉、生きることそのものの言葉です。そこには泣き叫びやだんまり、癇癪などの言葉ならぬ言葉も含まれます。高さんが『黙々』の中で書かれている通り、ぼく自身も、ここからなにかが生まれる場所であると感じたのだと思います。

そうして、学問研究の方に行き詰まりを感じ、人生お先真っ暗のとき、思い切って障害者運動に飛び込むことになりました。ちょうど運動体がヘルパーの事業所を立ち上げたところで、そこに就職したかたちでした。それから、20数年、今にいたっています。

当初は、身体障害者の介護保障運動に関わり、ここ京都でも2007年ごろに自分たちの運動で24時間介護保障制度を成立させることができました。ただ、同じころ、身体障害者は自分の声で自分の意見を通しやすい、だから運動的にも成果を上げやすい、でも、知的障害者は、身体障害者に比べてもなおいっそうその声は聞かれにくい、言葉という表現手段では非常に不利な場合が多く、知的障害者の自立生活はほとんど進んでいない、そんなことに疑問を感じていました。

だから、ピープルファースト京都という知的障害者の当事者団体にも支援者として関わるようになり、知的障害者にとっての主体的な活動というものを当事者と一緒に

模索するようになりました。また、同時に知的障害者の自立生活にも取り組むようになりました。京都では、2011年ごろに、知的障害者の24時間介護を伴う自立生活が実現し、その後、多くの知的障害者が一人暮らしをはじめるようになりました。

運動は順風満帆に進んでいっていた感じがあったのですが、2010年代半ば頃からある種の行き詰まりを感じるようになりました。が、そのことはまたのちほど話したいと思います。

ともあれ、障害者運動に関わる中で、ぼく自身は自分の生の意義を取り戻したように思います。また、運動の中で感じたことや、世間に伝えねばならないことなどについて文章を書くうちに、『介助者たちは、どう生きていくのか』（渡邉 2011）と『障害者の傷、介助者の痛み』（渡邉 2018）という本も二冊出させていただきました。頭の中でむりくり言葉をつなぎ合わせたのではなく、生の現場から生じてきた言葉を文章にしていくことができたと思っています。

また、今思うと、言葉だけをおって勉強していた時期の経験も、決して無駄ではなかったのだと思います。自分自身の心の中に、現実やなんらかの既成概念に囚われすぎない思考空間を構築できた気がしています。それはひょっとしたら「人文学」の力だったのかもしれないです。

ここで、少しだけ、日本の障害者運動をふりかえります。日本の障害者自立生活運動は1970年頃にはじまったと言われています。この時期に、その後の自立生活運動の展開につながる「運動の原点」が見いだされたと思います。もっとも代表的なものが、青い芝の会の行動綱領です。ちょっと抜粋します。

一、われらは、自らが脳性マヒ者であることを自覚する。
われらは、現代社会にあって「本来あってはならない存在」とされつつ自らの位置を認識し、そこに一切の運動の原点を置かねばならないと信じ、且、行動する。

一、われらは、愛と正義を否定する。
われらは、愛と正義のもつエゴイズムを鋭く告発し、それを否定する事によって生じる人間凝視に伴う相互理解こそ真の福祉であると信じ、且、行動する。（横塚 2007: 110）

その当時、障害者を取り巻く環境は、ともに学べない学校、乗れないバスや電車、入れないお店、ともに暮らそうとしてくれない地域社会など、障害者にとっては差別以外になにもない社会でした。そして、母親がぼろぼろになるまで障害をもつ子どもを家の外に出さず家の中で世話し続けることが「愛の営み」とされ、地域から隔離して巨大収容施設をつくることが「社会正義」でした。

青い芝の行動綱領は、当時の社会の通念であった「愛と正義」の虚妄を見抜き、さらに、その虚妄をつきつめたときにあらわれる、自分たちがこの社会では「本来あってはならない存在」なのだという「自覚」を、運動の原点とみなしました。

またこの「自覚」の強烈なところは、単に社会の側の愛や正義の虚妄を指弾するだけではなく、自分たち自身の中にもある差別意識をこそ自覚せよ、という点でした。つまり健常者に憧れ、より重度の障害がなくてよかったと思い、無意識のうちに自分の存在を、また障害者という存在を否定してしまっている、自分たち自身の中に差別意識があるということを突いた点でした。

青い芝の会のレジェンドの一人、横塚晃一さんの文章を引用します。

「脳性マヒ者としての真の自覚とは、鏡の前に立ち止まって（それがどんなに辛くても）自分の姿をはっきりとみつめることであり、次の瞬間再び自分の立場に帰って、社会の偏見・差別と闘うことではないでしょうか」（横塚 2007: 87）

けれども、それぞれに内面を突き詰め、自身の差別意識を問題にすることは自分にとっても他者にとってもとても過酷なことです。横塚さんは、こうした障害者運動の原点を突き詰めた障害者問題に「真剣に取り組めば取り組む程、相手に肉迫すればする程」、障害者、健全者に限らず、「相手を傷つけ窮地に追い込む結果になってゆくのである」とも述べ、さらに、「このようにすべての行為を愛でも善でも正義でもないとした時に、あとに残されたものは絶望なのである」と言います (Ibid: 149)。

1970 年代、運動の最初期に横塚さんが伝えたこの「絶望」は、『黙々』の中で高さんが感じていた「絶望」に近いものと思います。

この絶望については、この報告の最後にもう一度立ち返ります。

さて、このような「絶望の自覚」を根本においた障害者自立生活運動ですが、ぶっちゃけですが、絶望の自覚だけでは運動は前に進みません。ある程度健常者社会の価値観とも妥協しつつ、物理的に勝ち取れるものは勝ち取り、時に自分の牙を隠しつつも、この世の中、障害者が住みよい社会にしていくんだという運動も必要になってきます。ここにはもちろんいろんな運動の立場があり、とても複雑ですが、それでも総じて、日本の障害者運動は、地域での 24 時間介護を獲得し、重度の障害者でも施設や親元でなく、地域で暮らせる制度をつくってきました。日本の障害者介護保障の運動が、さまざまな立場が合流しつつ展開していったことについては、『介助者たちは、どう生きていくか』（渡邉 2011）の 3 章、4 章に詳しく書いているので、またご参考にしていただけたらと思います。

地域での 24 時間介護保障は、90 年代半ばごろから 2000 年代、2010 年代にかけて徐々に全国各地域で成立していきました。これまで運動をひっぱってきた身体障害者

については、2010年代半ば頃には制度保障のめどはかなりついていたと思います。

ところが、です。2016年7月26日に「意思疎通のとれない者たちは安楽死させるべきだ」として、相模原障害者施設入所者殺傷事件がおこり、19名の知的障害者が殺害されました。犯人は、施設に入所しており、世間的には「話せない」と見なされた障害者たちを殺害したのです。彼の考えでは、その殺人が世界平和につながる、というものでした。

もちろん犯人に対して多くの人が憤ったのですが、しかし、その前に、施設に入所していた人たちを忘却していたのは、この社会に住む人々のほとんどではないか、という点も問われるべきことでした。この点に関して、ぼく自身は「亡くなられた方々は、なぜ地域社会で生きることができなかったのか？　――相模原障害者殺傷事件における社会の責任と課題――」という文章を事件から2週間後に書いています。その文章は、『障害者の傷、介助者の痛み』（渡邉2018）に入っています。

実際、割合的には、当時成人の知的障害者の4人に1人が入所施設に入っていました。身体障害者の自立生活がある程度進展する中で、知的障害者の地域自立生活は取り残されていました。多くの知的障害者の声は、「聞かれなかった声」だったのです。自立生活運動においても、知的障害者の自立生活を支えることのできるセンターは数限られていました。その後、多少は知的障害者の地域生活も進展していますが、まだまだ、この日本でも、「聞かれていない声」は数多くうずもれています。私たちが、その声を聞くことのできていない人が本当はまだまだたくさんおられるのです。

なお、2022年、国連から日本政府に対して、障害者施策に対して厳しい勧告が提出されました。「脱施設」に向けた取り組みもその中に含まれ、政策的に多少はその方向性が盛り込まれました。その方向性をどう実現していくのかは、現場にいるぼくら自身の課題でもあるし、この社会を構成しているみなさんの課題でもあると思います。

もう少し他にも言いたいことはあったのですが、時間がオーバー気味なので、ちょっとまとめにうつっていきたいと思います。

ぼく自身は最近、知的障害者や精神障害者の地域生活支援に関わることが多いです。入所施設や精神病院からの地域移行の支援にも取り組んでいます。そんな中、なかなか自分たちでは手に負えない現場の課題にもよく出会うようになりました。2010年代半ばごろまでは、それなりに運動は前向きに進み、すべての障害者が地域で自立生活できるのではないか！　という確信も抱いていたように思います。

けれども、最近は、そんなにも前向きに進んでいけない現実が目の前にあります。支援の現場で、しばしば、他者を脅かすような暴言や暴力に出会います。ぼく自身も当事者との関係で傷つくことはあります。

依存症や嗜癖（アディクション）によって、お互いにかわした約束が守れずに、人間不信が広がる現場があります。過去のいじめ体験や差別体験がトラウマとなり、対人関係の基礎となる信頼が構築しがたい現場があります。運動的にはわりと声高に「脱施設」を掲げている一方で、現場的には安易に「脱施設」を進められず、一定の措置入院や施設入所を否定できない現実があります。いろいろ手を尽くしつつ、家族、支援者がどれだけがんばっても、他者や自己への暴力が止まらなくなり、司法や精神病院の力を借りざるをえない現場も正直、あります。

ある程度、身体障害者が中心につくってきた、自立支援、当事者主体、本人の意思の尊重などの枠組みは、現在の法制度の基本的枠組みにもなりつつありますが、その枠組みでは、支援しやすい利用者、模範になりやすい利用者に対して、劣位に置かれやすい利用者、あるいは支援を受けにくくなる利用者もいるように思います。

もちろんかつて、身体障害者の声自体が、この社会からは聞かれていませんでした。けれども、その声が聞かれ、かたちになっていくとき、とりこぼされるものがあるのではないか、その感覚が重要になってくると思います。

いうまでもなく、同じ身体障害者の中でも、現在の枠組みの中では優位におかれやすい人・支援を受けられやすい人、劣位に置かれやすい人・支援を受けにくい人という差異が生じてきています。新しい制度保障の枠組みや価値観が、また新たに別の人を抑圧することもあるのだと思います。

正直、支援の現場は日々自転車操業で、毎日自問自答しながら進めています。

それが、ぼくの報告の副題「聞かれなかった声の展開」ということです。

ラジオの電波のように、ある声に波長を合わせて聞こうとしたとき、別の声が聞こえなくなる。だから別の声に波長を合わせようとする、それでまたその別の声を聞けたとき、もともと聞こえていた人の声が聞こえなくなるかもしれないし、さらに別の声が聞けなくなっているかもしれない。

ぼく自身、自立生活運動に関わりつつ、その都度の現場の運動課題に取り組む中で、こうした「聞かれなかった声の展開」を感じてきました。

『黙々』で高さんは聞かれなかった声に耳を傾けることに務めていますが、その声を聞いた後の展開も大事になると思っています。だから、聞かれなかった声の後の展開も、一緒に考えていけたらと思っています。

最後に、また障害者運動のレジェンド、横塚晃一さんに戻りたいと思います。

彼は、自己の内面を徹底的に追求し、どこまでいっても自分の言動には今の自分を守り他者を傷つけるような罪悪性を伴ってしまう面があることを見つめ、「このようにすべての行為を愛でも善でも正義でもないとした時に、あとに残されたものは絶望

なのである」と言います。

では、「絶望」はそこで終点なのでしょうか。その先があるのでしょうか。横塚さんは次のように言います。

> 全ての行為が罪の積み重ねであり、差別を伴うものであるとしても、なおかつ人は（私は）生き続け行動し続けなければならない。それは行けば行く程、行動・失望、行動・絶望への道であり、絶望する己に絶望した時、そこに悲しみがある。その「悲の場」に待って私は多くの人に逢いたいと思う。そこはこの上なくすばらしい世界であろう（横塚 2007: 150）。

引用はここで終わります。絶望の果てには「悲しみ」があると横塚さんは言います。でも、その「悲しみの場」、「悲の場」は、多くの人が出会いうる「この上なくすばらしい世界であろう」とも語られます。

この「悲の場」は、日本の障害者運動の宝なのだと思います。

以上で、ぼくからの報告を終わります。

参照文献

ウェーバー, マックス , 尾高邦雄訳 , 1980,『職業としての学問』岩波文庫 .

高秉權 , 2023, 影本剛訳 ,『黙々 聞かれなかった声とともに歩く哲学』明石書店 .

横塚晃一 , 2007,『母よ！　殺すな』生活書院 .

渡邉琢 , 2011,『介助者たちは、どう生きていくのか』生活書院 .

————, 2018,『障害者の傷、介助者の痛み』青土社 .

近いところの声なき声、遠いところの声なき声

――障害／パレスチナ／聞くこと――

北川　眞也

北川と申します。今回、「世界に声なき者はいない。ただ聞かない者、聞こうとしない者がいるだけだ」（卫 2018 = 2023: 5）と真実を鋭く告げる『黙々』を読み、また先ほどの高秉權さんの「失敗」のお話を聞いて思い出したことがあります。個人的なことで恐縮しますが、それは昨年亡くなった自分の父のことです。父は 2012 年に咽頭癌の手術をし、声帯を切除したために、声を出すことができなくなりました。それまでは非障害者として生きてきた人でしたが、突然声を失ったわけです。退院して最初のほうは、私も含め家族は、「声は出なくなったけど生きられるんやからまあええやんか」とか言っていました。また病院からは、ゲップが出る仕組みを操れるようになったら、また話せるようになると教えてもらいました。実際、そうやって話している人も紹介してもらいました。当然、簡単なことではありません。練習が必要です。最初はソフトに「練習したら？」って声をかけていました。でもだんだん時間が経ってくると、「練習せえへんのか、なんでなん？」となってしまう。父はこの発声練習と方法に何の関心も示しませんでした。面倒くさい、それやる暇あったら酒飲みたいわという感じでしたね。でも確かにそうだよなって思います。大きな手術して声出なくなって大変な思いをしてるのに、はい次はこれって周りから言われても。あと、片手で持てる小さな機械をあごの下に押し当てたら声が出るというやり方もありましたが、それもまったく使わずでした。

なので、どうしても伝えたいことがあったら、字を書いてくれと言いました。それも面倒でしょうけど、書いたらわかるやんと。でも、人のことはまったく言えませんが、父は乱筆がすぎるため、書いてもらったら書いてもらったで読めないわけです。だからこちらも勝手な解釈をしたり、もう一回書いてくれと言ったりと、余計にややこしくなってしまう。互いにイライラする。それやったら、ひらがなの文字盤を使うのはどうかと言いました。指を差したらわかるからと。でもそれもぜんぜん使わない。結局、父がなんとかして絞り出すかすかな音、唇の動き、身振り、表情から、こちらは言わんとすることを読み取ろうとする。でもやはりわからない。まさしく聞いたふり、わかったふりをしてしまう。日々の忙しさや余裕のなさなどもあいまって、特に同居する母は父との喧嘩がほんとうに多かったのではないかと思います。あ、もともとですね（苦笑）。

結局のところ、私たちは、いや私は健常者的身体としての父の姿を求めてしまっていたのだと思います。つまり、発声練習や機械の利用を通して再び声を出せる身体、

言葉を発せられる身体です。高さんのお話にあったAIが聞き取れる言葉を発する身体、あるいは『黙々』に出てくるエイブリズム（非障害者中心主義）に依拠した身体と言えるでしょうか。それはあくまでも健常者の身体の延長にあるものでしょう。でも父はある種、そうした身体を徹底的に拒否していたわけです。私は声なき父をこちら側に用意されている言語的世界へと招き入れ、そこにおいて声を、すぐに意味がわかる言葉を聞こうとしていたわけです。後でも触れますが、高さんが言う「聞くこと」とはまるで別物ですね。

私は地理学を専門とし、主にイタリアのことに関心を持ってきました。ここしばらくは、特にランペドゥーザという小さな離島、地中海を船で渡る移民・難民がたどり着く場所について調べてきました。そのため、父のそうした状況を目の当たりにしつつも、私は遠いイタリアへ行ったり、地中海の出来事に日々多くの注意を向けたりしていました。やや大袈裟な物言いを許してもらえれば、他の誰とも異なるまさに目の前にいる人、近くにいる人、この場合なら、父が言葉を聞いてもらおうと、なんとかして筋肉を繰り返し動かし声を出そうとしていたにもかかわらず、それを聞こうとするよりも、はるか遠い土地の声を聞こうとしていたと言えるかもしれません。少し言い方を変えれば、仕草や沈黙や熱量を含む、身体的－言語的な触れ合いがなされうる場所の声にならない声よりも、国境の彼方における場所の声、地中海で溺死の危険を強いられる移民・難民の声なき声、（『黙々』で高さんがセウォル号事件の死者について述べる言葉を借りるなら）沈黙ではなく絶叫とともに沈んでいった移民・難民の声なき声、そして本土によって一方的に語られる離島の声にならない声を聞こうとしていた、ということです。なかなか中途半端にしか取り組めていませんが。

『黙々』には、高さんが直接また間接に遭遇してきたさまざまな人たちの生の存在感、喪失感、痛みや苦悩、闘いの模様がありありと描出されています。2018年に済州島にやってきたイエメンからの難民の話も出てきます。そうした話の底流には、高さんのノドゥル障害者夜間学校の経験、目の前にいる生徒・障害者たちとの出会い、持続的な接触という経験があるのかと思います。その経験のただなかから生み出されてきた言葉と文、哲学的で政治的な思考の過程には深い感銘を受けました。というのも、その思考の過程が、実存的なものでもあり、まさにそれゆえに読者自身の日常生活へとすぐさま跳ね返ってくるものだからです。『黙々』で展開される洞察に影響を受けながら、今述べたような、近い場所の声を聞こうとする態度や意志と、遠い場所の声を聞こうとするそれとの関係について少し考えてみたいと思います。

普段の生活のなかで、どこか遠い場所の声を聞こうとする、あるいは遠い場所からの声をまず聞こうとすれば、それは誰かが

書いたり、翻訳したり、映像にしたりするものを通じて受け取ることがほとんどですよね（まさに『黙々』という翻訳書のおかげで韓国社会について知り、障害者の声に何かしら触れられるように）。それは実際に出会う人、近くにいる人の声なき声を聞こうとすることとは、やはり異なる回路を通じてであると言えるでしょう。特にSNSのようなすべてが可視化されるようで、まるですべてが身体と精神を高速で素通りしていくようなデジタル回路においては、生そのものの存在感に触発されることはより難しい。日常生活を送るなかでは特にです。この回路では支配的な声がいっそう支配的となり、声にならない声は、たとえ言葉として可視化されていたとしても、より周縁化させられる傾向にある気もします。

『黙々』では、障害者の生に対する露骨な暴力、また自然化された暴力の諸相が描かれています。たとえば処分すべく重荷のごとくかれらを扱う収容と閉じ込め、かれらの移動を妨害するだけではなく、かれらを都市における人・事物の流れを乱す「異物」とする敷居や段差、境界だらけのインフラ空間。段差ゆえに横断歩道に入れず、車道側を通行する車いすの障害者を違反として取り締まり、障害者の存在自体を犯罪化する社会的・法的・警察的権力。ここにおいて私は、移民・難民の移動を妨害すべく、地中海地域に増殖する境界や収容所のことを思い出さずにはいられません。『黙々』にある地下鉄駅の階段に設置された車いすリフトから障害者（ノドゥル障害者夜学の生徒とのことです）が転落したという事実は、地中海において進行中の移民船の沈没を思い出さずにはいられません。

しかし同時に、今この瞬間に、障害者への暴力を強く問題化するこの本を読みながら、私が強く想起したのは、今ニュースで広く伝えられている遠くの場所、パレスチナ人たちが置かれてきた状況です。周知の通り、イスラエルの植民地的暴力はパレスチナを破壊し、パレスチナ人を追放、逮捕、殺戮し続けてきました。そして現在、ガザではジェノサイドが進行しています。

ここで言及したいのは、ガザにおいては、パレスチナ人に傷害、いや障害を負わせる権力が積極的に行使されてきたということです。クイア理論の研究で知られるジャスビル・プアの議論によれば、それはイスラエル軍の銃撃や爆撃の結果、偶然障害を負ったというものではありません（Puar 2017）。ある時期から、イスラエル側はデモ隊を追い散らかすよりも、デモに参加するパレスチナ人の下肢を狙撃するようになりました。しかし、ガザでは十分な治療を施せない。ヨルダン川西岸地区への移送も妨害される。その結果、肢体の切断を強いられるのです。実際、ガザ地区とヨルダン川西岸地区には、障害者の割合が世界でもっとも高い地域があるとのことです。ガザでデモがあるとなれば、車いすの人びとが多く集まるものとなる。そして次には、こうした障害者たちが爆撃、銃撃で殺され

る。逃げ遅れることもあるでしょう。イスラエルの植民地的暴力は健常者の身体、イスラエルの優生的身体を中心に置き、既存の障害者に対する差別と暴力をまさしく露骨に再生産し強化するものにほかなりません。これはパレスチナ人を「無力・無能」化しその政治的行為を封じるべく、イスラエルが戦術的かつ戦略的に実行に移してきた支配のかたちなのです。

また、そもそも忘れてはならないのは、爆撃を受け続けるガザ自体が一つの収容所であるという厳然たる事実です。ガザの人びとはそこに閉じ込められ、外に出られません。イスラエル側の許可がなければ、何も入ってきません。2007年の封鎖以来、イスラエルはガザに出入りするすべての人や物資の移動をコントロールしています。食糧や建築資材から、水や電気、燃料、医薬品に至るまでの何もかもです。そのすべてをガザの人びとがぎりぎり生きられるか、生きられないかぐらいしか入れさせないというわけです。プアの議論を参考にすれば、これはパレスチナを「衰弱」させる権力と言えます（Puar 2021）。「衰弱」はヨルダン川西岸地区においてもまた顕著です。そこではパレスチナ人にとって日常的な移動すらきわめて困難を要するものなのです。たとえば、ここから京都駅まで行こうとすれば、歩いたらこれくらいの時間がかかるかな、バスや地下鉄ならこれくらいかなとだいたい計算できるわけですね。しかし、ヨルダン川西岸地区には数々の検問所という境界がある。そこを通らないと仕事に行けない、大学に行けない、人に会いに行くこともできなかったりする。そこで何が起こるかはわからない。早朝から長時間の待機があり、嫌がらせや暴力もある。でもあるときはすんなり通れる。また普段は通れる道路に、ある日突然障害物が置かれて、「壁」の役割を果たすこともある。そもそもですが、ヨルダン川西岸地区におけるインフラや空間設計それ自体が、ユダヤ人の移動を円滑にすると同時に、パレスチナ人の移動を多大な時間を要するもの、不確実なものとするため、またそれによって疲弊させ消耗させ、衰弱させるために用意されているわけです。パレスチナ人にとっては「段差」と「敷居」だらけなのです。このような障害化－衰弱化の暴力が覆うパレスチナの状況に目を向けて、『黙々』で描かれる障害者の状況に戻るときに、いったい何が言えるでしょうか。

パレスチナのような、遠い土地で押し殺されていたり、うめいていたり、絶叫のように吐き出される声、遠いところから何かしら響いてくるそうした声、さらには音、沈黙を聞こうとする態度は、近くにいる人、目の前にいる人のそれを聞こうとする態度と、どのような関係を持ちうるのか。高さんが『黙々』のなかで述べるような目の前にいる障害者の声、渡邉琢さんがお話してくれたような日本にいる障害者の声を聞こうとする態度と、いかなる関係をとりうるのか。すれ違うのでしょうか。別々のもの

なのでしょうか。それとも、重なり合うのでしょうか。響き合うのでしょうか。

今、遠いパレスチナからの声、またパレスチナをめぐっていろいろなことが伝えられるなかで、軍事関連に直結する連携であれ、そうでないものであれ、BDS（ボイコット、投資撤収、制裁）運動をはじめ、大学や企業のイスラエルとの連携を拒否する動き、港湾でパレスチナ人を蹂躙するのに用いられる武器の積出を拒否する動きが各地でみられます。義勇兵として参加する人がいてもおかしくはありません。手前味噌ではありますが、『アンチ・ジオポリティクス』（青土社、2024）という本のなかで、私はある土地の出来事や闘争の歴史・現在を地下に潜るかのように掘り下げて研究するほどに、その場所に収まることのない地理的な広がりのなかに、遠く離れた土地との現実的また想像的なつながりのなかに気つけば足を踏み入れているような地理的世界を描出してみたつもりです。それを既存の世界の地政学的また地経学的な地図とは異なる、対抗的な流動の世界地理です。強引ですが今の話に近づけて言うなら、近くと遠くが絡み合っては混ざり合い、共鳴していくような世界地理とでも言えるでしょうか。

先ほど高さんから、今や韓国では障害者に対する偽善的な笑いすらも失われたというお話が最後にありました。人種主義的で優生主義的な権力が世界の眼前で露骨に行使されています。自立と自由の名の下に、相互に絡み合うさまざまな身体、意識的にせよ無意識にせよ、相互に関係し支え合っている生というものを断罪するような政治、さらには老いていく身体を否定するような政治が各地で支持されています。このような状況を受けて、イタリアの思想家フランコ・ベラルディ（ビフォ）はこう述べています。

> あからさまな嘘にもかかわらず、低級な男性優位主義にもかかわらず、群衆はトランプを信奉している、と考えねばならないのだろうか？……あるいは、推論を逆にすべきなのだろうか？私の仮説は、倫理的判断の正真正銘の反転にわれわれは直面しているというものだ。つまり、米国人がトランプに投票するのは、まさにかれが強姦魔で嘘つきだからである（Berardi 2024）。

こんなにひどいことをする政治家なのに、どうして人びとは支持するのだろうか、ではなく、差別の言説を平然と垂れ流し、既存の規範や価値を蔑ろにする政治家だからこそ支持されているということです。

激化してきた競争と広がりゆく戦争のなかで、もはや隠れ蓑すら必要としないような優生主義的で人種主義的な暴力、聞こうとする意志をあげつらい、声にならない声を鎮圧するような暴力が、この土地でもあの土地でも、この場所でもあの場所でも、イスラエルでも韓国でも日本でも、地球規模に広がっています。だからこそ、遠い土

地からの声にならない声、絶叫、沈黙を聞こうとする意志や欲望、運動が、近い土地、この土地の声にならない声を聞こうとうする力を減退させないような仕方で、むしろ共鳴し合い、翻訳し合い、その力を増大させるような回路をつくりだすことがとても大切な気がするのです。この土地からあの土地へという逆の動きも然りです。それは完璧になされる類のものではないでしょうし、時間やエネルギーも含めて簡単なことではないでしょうが、私はこのように感じています。

そのうえで最後に、「聞くこと」について一言だけ述べさせてください。ときにそれは正しいモラルであるかのように受け取られることがあります。この社会のせいで周縁化させられた声なき者たちの声を聞かなければならない。とすれば、社会的に特権的な位置にいる者は自分のことを語ってはいけない、声に出してはいけない。他者の声に耳を傾け、それに従って行動しなければならないのだと。その結果、そんなにずっと聞いていられない、そんなたくさん聞いていられない、押し付けるな、そこには嘘の話しかないと言わんばかりに、反動的な仕方で自己の主体、自己の自由を立ち上げ、声なき者たちに攻撃的に振る舞うようになってしまう。自分のほうが他者に抑圧されていると感じる一種の転倒が起こってしまうわけです。これは日本を含め、先ほどお話したこんにちの政治的情勢と深く関わる感情、態度だと思います。

しかしながら、聞くというのは、共同の作業であるとは言えないでしょうか。声なき声を聞く側の言語的世界の内側へと招き入れて了解するような構図であれ、ただ相手の声を受動的に聞くようにイメージされる構図であれ、いずれもが一方から他方への関係としてしか想像されていません。ですが、この点で、高さんが先ほど最後にお話した内容はとても印象深いものでした。自死したチェ・ジョンファン烈士と、烈士の遺言を記録したユヒとの関係はいかなるものだったでしょうか。ユヒは「オ、オ……」というチェ・ジョンファンの声、まばたき、唇の動き、そして沈黙を、一方的に了解したわけでもなければ、そのまま受動的に伝えたわけでもありません。そこには、聞き取れないなかでも、なおも創意工夫を通じて聞こうとするユヒからの応答が、私の言葉で言えば、ユヒのユヒによる主体形成過程が存在しています。高さんのお話から両者のやり取りを想像するなら、「復讐」という言葉は、チェ・ジョンファンの言葉というだけではなく、ユヒの言葉でもあった。両者は重なり合っている。それは二人の言葉、共同の言葉としか言いようがないように思えるのです。

聞くという行為は、自分を押し殺し、無色透明の存在に仕立てあげて（そもそも不可能なことです）、他者に耳を傾け、他者の言葉に応答するという機械的なものではありえません。ユヒはチェ・ジョンファンの生のほうへおのずと向かっている。その

生を吸い込んでいく。「復讐」という言葉は、聞こうとする側にいたはずのユヒ自身の言葉、「私」の言葉としてもまた生成してはいないでしょうか。

ここにおいて、ノドゥル障害者夜学のホームページに掲載されていたとして、『黙々』で引用されている、メキシコ・チアパスにおいて自主管理に取り組んできた先住民組織サパティスタの女性の言葉（元はオーストラリアの先住民女性であるリラ・ワトソンの言葉）が背中を押してくれます。「もしあなたがわたしたちを助けにここに来られたのであれば、あなたは時間を浪費しているのです。しかしもしあなたがここに来た理由が、あなたの解放がわたしの解放と緊密に結びつくからであるならば、ともに働いてみましょう」（辺 2018 = 2023: 22）。こうは言えないでしょうか。それは紛れもなく、死の間際にあったチェ・ジョンファンの闘争ですが、ユヒの、ユヒ自身の解放闘争としてもあったと。

ここには、聞こうとする者と声のない者、言葉がある者と言葉がない者の間の区分を宙吊りにするような共同の関係、こう言ってよければ、コミュナルな関係が生み出されていたのかもしれません。いくぶん勝手に私は思考していますが、もちろん、これは極めて過酷な状況でのことですし、美化すべきものではありません。また、声なき声を聞くというかくも困難な行為は、対等な関係のなかではじまるものではそもそもありません。ズレや摩擦は聞こうとうする行為の存立条件ですし、誤読もあるでしょう。それでも、こんにちの世界に風穴を開けるような、こうした共同の関係、言葉、声を紡ぎ出す営みが消えたわけではありません。

私の調査経験からですが、ランペドゥーザ島でもこれに近いことがあったように思います。一部の島民が地中海を渡る移民の声を聞こうとする試みのなかにです。かれらは移民の権利を求めるだけではなく、同時に自分たちの生活をめぐる社会闘争と、さらには自分たちの島の歴史と生活における移民性や難民性と交わるような批判的で、創意工夫のある想像力を表現していました。そして何より、高さんは「失敗の記録」と言うわけですが、この『黙々』という本自体がこのような共同の産物ではないでしょうか。もちろん、高さんの「聞く」の経験は容易な過程ではないでしょうし、私などには想像できない緊張の連続かもしれません。しかしここには、高さんと生徒・障害者とがおのずと互いを吸い込み合っている関係、欲望し合っている姿が深く刻まれているように思うのです。

父の話に戻ることを許してもらえば、声を失った私の父は沈黙していたわけではない。沈黙を吐き出してもいた。手を叩いて音を出し、声を出そうと身体を動かし、声にならない声を何度も吐き出していた。果たして、私はどれほどの瞬間においてユヒのようでありえただろうか。『黙々』を読んで、そして高さんのお話を聞いて、つい

そんなことも考えました。

参照文献

고병권 , 2018, 묵묵 : 침묵과 빈자리에서 만난 배움의 기록 , 파주 : 돌베개 .（影本剛訳, 2023,『黙々――聞かれなかった声とともに歩く哲学』明石書店.）

Berardi, Franco (Bifo), 2024, “Brutalismo suprematista libertario,” Comune-info, (Retrieved November 5, 2024, https://comune-info.net/brutalismo-suprematista-libertario).

Puar, Jasbir K., 2017, *The Right to Maim: Debility, Capacity, Disability*, Durham and London: Duke University Press.

Puar, Jasbir K., 2021, “Spatial Debilities: Slow Life and Carceral Capitalism in Palestine,” *South Atlantic Quarterly*, 120(2): 393-414.

質疑応答

瀬戸徐：それでは会場から質問などがあればお願いいたします。

末岡：6 年前にソウルに行ったときに、友人の勧めでソウル市役所前の障害者の座り込みに連れて行ってもらいました。友人がなぜ勧めてくれたのか、その意味が今日はっきり分かりました。その意味がなにと近いのかを考えてみたとき、個人的な経験ですが、わたしが大学に入ったとき、先輩から公園のテント村に絶対行ったほうがいいよと連れて行かれたことと似ています。2000 年代の前半、大阪の長居、扇町、大阪城といった公園には何千個とブルーシートのテントがあって、そこで生活する野宿者のコミュニティがありました。そこでわたしが経験したことは、おっちゃんの話に適当に相槌をうったことも含めて、似た経験だったのです。耳を傾けて話を聞くということが沈黙というものを前提にしているという話がありましたが、わたしは基本的に沈黙を恐れています。なぜなら自分の話を聞かせるために相手に沈黙を強要したり、なにかを聞き出すために沈黙で相手を圧迫するというように、沈黙はネガティブな意味で考えがちだったからです。しかし今日は沈黙についてすごくポジティブな意味を聞かせてもらいました。そこで質問した

いのですが、わたしの経験では見えない暗黙、「黙々」の黙というより、見えない暗黙という状態こそ、最も暴力が行われる場所になっています。評者からもあったように、最も見えない収容施設では暴力が行われているし、行われやすい場所です。大阪のテント村では可視化されたものを作り上げた。そこで、ソウル市役所前で集まっている人たちの座り込みも、目に見える形で、むしろ暗黙になった状態を可視化させるようなものを生み出していると思います。耳を傾けることと、見えること・見ることが、どのように交わっていけるのだろうかというのは自分にとっても課題なのですが、この点についてコメントをお聞きしたいです。

高秉權：権力というのはそもそも音を立てません。そして音を立てるのは大抵は劣悪な地位にあるものたちです。これは魯迅の言葉です。だから音を立てるものは力のないものであり、そして近いうちに敗北する予定のものです。音を立てることもできず死ぬことは永遠に死ぬことだと魯迅は語りました。沈黙させること、そして声を聞こえないようにすること、そこにおいても抵抗はあるのですが、聞こえないということすらも分からないこと、その無感覚、これがわたしがお話ししたいものです。わたしがお話ししたい沈黙とは、正確に言えば、声を出すことのできないという部分ではなく、言葉がはじまる直前、それがまだ聞こえていない状態で、それをいかに知るのかということです。言葉は聞こえてきていませんが、それゆえ声が聞こえないのですが、「話そうとしている」と感知する人のみが耳を傾けることができます。ですからわたしの関心は言葉がどのようにはじまるのか、そして言葉がはじまるためにはどのような準備が必要なのか、そしてその言葉を感知して言葉を迎えるためにわたしたちにはどのような準備が必要なのか、ということです。つまり、あたかも声がないようなとても無感覚の状況で、「そうではない」のだと、「声がいま聞こえてきている」と耳を最初に傾ける瞬間、そのような意味で惨い暴力としての沈黙にどのように抗うか、という話です。その時生じることに関する話なのです。そのために最初に必要なことは、妙な言い方ですが、無感覚に対する感覚を持つことです。問うべきなのは、自分自身がどれほど無感覚なのか、たがいに対してどれほど無感覚なのか、世の中に対してどれほど無感覚なのか、それを感覚する感覚はいったいどのように作られるのか、ということです。はっきりとなにか答えを持っているわけでもないので、ここまでにさせていただきます。

瀬戸徐映里奈：本質的な質問をありがとう

ございました。時間の制限もありますので、評者それぞれのコメントについて、高秉權さんからご発言いただけますか。

高秉權：お二人の話は考えさせられることが多くてメモをずっととりましたし、新しく知ることだけでなく、新しく知らなければならないと感じることもたくさんありました。冨山一郎さんが書いてくださった『黙々』の書評のコメントではっとさせられたことですが、「高秉權の」認知ではなく「黙々の」認知、つまり「高秉權の」という所有格を取るべきだと書かれていました。それはわたしの考えに対するコメントではなく、黙々という言葉で提起した問題に対するコメントなのです。コメントという言葉自体がともに考えるという意味ですから、そのように考えるべき問題をお二人に提起していただいたと思います。渡邉さんの言葉のなかで二つの言葉が響いたのですが、一つは聞こえない声の展開ということですが、本当に重要なことです。20年におよぶ韓国の障害者運動の歴史は、いつも主役たちが交代しつづけてきました。最初は比較的軽度の身体障害者たちが運動をはじめ、その後は脳性まひの障害者が、そして現在デモの最前列にいる人びとは発達障害者です。だからこれまでわたしたちが知っていたものとまったく異なる運動にいつもなるのです。たとえば発達障害者たちはデモで発言をするさいに歌ったり踊ったりします。だれもコントロールできない状況なんですが、これもまた新しい姿です。しかしわたしたちがこのような新しい声に出会うことをやめるとき、運動は終わってしまうだろうと話しています。運動の主体が変わればチャンネルを変えるように別の運動に転換されますが、提起されつづけている問題は、聞こえていた既存の声の主人公たちと新しい声の主人公たちが、どのようにともに関係をつくることができるのかということです。たとえば、わたしたちは重度障害者や脳性まひの障害者の職場をつくれと、非障害者たちを補助するのではない職場を要求する闘争をしてきました。そして獲得したものが、仲間と相談したり、脱施設をした障害者が施設にいる人と面談したり、かれらに仕事や活動を紹介したりするという仕事です。これは一カ月に既定の人数と面談しなければいけないという実績が求められる仕事なのですが、この仕事をしていたある重度障害者が、その数を満たせずに自殺をしてしまいました。活動家たちは大きな衝撃を受けました。わたしたちも依然として非障害者中心主義の「実績」という問題を除去できていなかった、それと闘えていなかったと反省したのです。そのようななかでわたしに大きな

インスピレーションを与えたのはデモ現場における発達障害者たちの歌や踊りでした。わたしたちは、かれらの歌や踊りの価値が認められ、労働として認められるよう要求するべきであったと気づき、その要求をし、一定程度の成果を得ました。デモをして、歌い、自分の施設での経験を語る。これら全てを、公的価値を創出する行為であり最低賃金が保障され支払われる仕事とし、障害者の仕事全般を、そのような思考を前提に再編成しようとしたのです（なお現在の保守政権では、そのような仕事のプログラム自体がなくされようとしています）。新しい声が聞こえてきたときに既存の人びとの声とつながるためには、かなり異なる生の形をつくりつづけなければならないということ、新しい声でチャンネルを変えるのではなく既存の声と新しい声がともにあれることを、既存の尺度や根拠をこえて考えてこそともにつくることができる、と考えます。ともかく、その声が聞こえた後にどのように展開されていくのか、この問いはあまりにも重要で、わたしもこれから考えつづけていきたいと思います。そして横塚晃一さんの言葉である「悲の場」、絶望が絶望するときこの上なく素晴らしい世界だという言葉は、多くのことを想起させますし、これからもこの言葉も抱えつづけたく思います。わたしはノドゥル障害者夜学にきて16年経つのですが、本当に重要なこの言葉に刺激されています。

北川さんはパレスチナ全体の障害化という非常に重要なことを仰いました。しかしわたしが最も考えさせられたのは、遠いところから聞こえてきた声と近くにある声をどのようにつなげるかという話です。済州島の難民の話もされましたが、韓国社会は本当に難民嫌悪社会ですが、これまであまり表面化していませんでした。遠くのヨーロッパの人種差別などはみんな批判したり非難したりしてきましたが、いざ韓国に難民がくると嫌悪が湧き上がったのです。これと似ているのが現在も行なっている障害者たちの通勤時間のデモです。4年前から通勤時間の電車を延着させるデモをやっていて、韓国社会では大騒ぎになっています。ある矛盾した世論調査があるんですが、一方では障害者が移動できないという問題や韓国社会における障害者差別は深刻だと回答した人びとは7～80％に達するのですが、同時にこのデモに反対する人もまた7～80％に達します。こんなに障害者嫌悪発言が噴出したことはありません。デモで障害者の活動家があまりにひどい暴言を浴びせられて倒れるほどでした。もちろん支持者も増えたのですが、嫌悪する人もその二倍以上は増えました。この運動は4

年目なのですが、あまりにもその嫌悪がつらくて、他の活動家にいつまでこの運動をやるべきなのか、わたしたちは成功しているのか、あるいは失敗しているのか、と訊いたことがあります。ある方は自分たちの運動は成功した、暴言を浴びせられることに成功したと仰いました。多くの人びとは笑顔で、障害者の権利と無関係のところで、障害者の愛についてあれこれ喋ります。しかし自分の前に現れた自分の権利を侵害する障害者には怒りだすんですね。わたしたちはその怒りを表面化することに成功したのです。パレスチナ問題など、メディアを通して遠くから声が聞こえてくるとき、人びとはパレスチナへの支持を語ります。しかしアラブ人が韓国に難民申請をすればとてつもなく怒りだします。そして怖がるのです。わたしたちは、わたしたちがいかに無感覚なのかを感覚させること、いかに嫌悪社会なのかを表面化することに成功したのです。だれもがすることができる、無知ゆえに笑顔でいられることがどれほど暴力的なのかを表面化したのです。わたしたちは果たして遠くから聞こえてくる声を本当に聞いたと言えるのでしょうか。韓国ではここ二〜三年、外国人保護所〔入管施設〕廃止運動がかなり活発になりました。そこには障害者運動も加わりました。その理由は、あらゆる人に権利があるからだとか、わたしたちも難民になりうるからだとかではなく、施設の経験ゆえでした。施設で自分たちが受けた暴力と外国人保護所で外国人が受けている暴力、そこからなんらかの感情、情動の変化があったと言えるでしょう。どのように難民問題と出会ったのか。それは具体的経験のなかで自分との連累を感じとるときに、その声が聞こえたのです。無感覚のまま笑顔でいるよりも、感覚して怒りと嫌悪の言葉を溢れさせることのほうがはるかにマシな状況だと思うのです。

瀬戸徐：ありがとうございます。会場から質問をいただき、最後に登壇者の方から答えていただきたいと思います。

光島：光島と申します。ぼくは全盲の視覚障害者で、現在は、鍼灸の仕事を生業にしながら、美術家としてタッチアートの可能性を追求するような作品を発表しています。1970年代から障害者運動に近いところにいて、青い芝の会のようなラディカルな障害者運動も知っていますが、今の日本の障害者運動を見ていると、障害者差別解消法ができて、今年からは合理的配慮の義務化などで、障害者が国から提供されるサービスに馴染んでしまう、与えられたもので満足してしまうのではないかという不安も感じたりしています。サービスの幅が広がることはそれはそれでいいことなのですが、ややもする

と日本の障害者はおとなしすぎると思ってしまうことがあります。最近の日本の障害者運動をふり返ると激しい運動みたいなものが見られないように思いますが、韓国の障害者運動の意欲や激しさはどこからやってくるのでしょうか？

徳岡：今の光島さんの質問と重なります。わたしは渡邉琢さんより少し前の世代の者です。日本の障害者運動は青い芝の会が一つのメルクマールとして語られますよね。それはそうなのですが、それ以前から、全国障害者問題研究会（全障研）という、いわゆる共産党系の障害者運動がありました。それは当事者ではない親・教員・施設職員・研究者による代行主義的な運動です。そのなかから1970年代に自立解放運動としておそらく最初に旗上げしたのが「関西障害者解放研究会」です。視覚障害者の楠敏雄（くすのきとしお）さんが中心に作られた運動をきっかけにして、70年代中頃に「全国障害者解放運動連絡会議」（全障連）が結成されます。そして全共闘運動が退潮した後の大学で、反差別闘争の一つとして障害者運動が起こっていきます。これがわたしたちの世代の経験です。その自立解放運動の流れが、いつの間にか途切れる時期があり、おそらく渡邉さんの世代の運動に直接バトンが手渡されないままだったのだと思います。表向きでは全障連の運動がどこかへ消えてしまった後で、JCILのような自立解放運動が生まれていったのでしょう。多様な障害者の運動の水脈を受け継げていけなかったことは残念でなりません。『黙々』の聞かれなかった声という言葉から考えると、運動のなかでも代表的な運動、誰が代表するのかという問題が出てくるのではないか。つまり、聞こえなかった声というものは、聴く側の姿勢の問題のほかに、代表されたものの背面に「隠れてしまった声」ものもあるのではないでしょうか。

わたしは大阪の教員グループで20年ほど前にスユノモを訪れました。そのときソウル市内で、身体障害者が車輪をつけたベニア板の「台車」に乗って、棒で地面を蹴って移動する姿を目撃しました。その当時、韓国の障害者のおかれている実情は日本以上に過酷な環境であったでしょうが、エネルギュッシュな姿を見たのです。日本でも70年代中頃から「移動権」という言葉自体は使っていなかったとはいえ、車椅子の障害者が天王寺の歩道橋の上で体を巻きつけて占拠して、歩道橋と歩道の段差が車椅子と障害者を排除している、と訴えました。これはまさに「移動権」の訴えです。それから同時期に、大阪環状線の福島駅で視覚障害者が転落し、両足を切断するという「事件」がありました。それを巡っ

て国鉄との裁判闘争がありました。このような歴史がほとんど語られていないのではないでしょうか。日本の障害者運動が青い芝の会を中心に語られるのは仕方がないにしても、あまりにもさまざまな運動史が忘却されてしまってるのは残念です。70年代中頃の日本でも、体を張った闘争が障害者のなかにもあったし、それはいつの間にか消えてしまった。そのあたりの総括がほとんどなされないままであることがわたしからすると残念なのです。高秉權さんが、ノドゥル夜学にかかわられるなかで、歴史のなかでの変化、先ほど光島さんが「激しい闘争の根拠」を問われたけれども、闘争の歴史的位相を提示していただけるとありがたい、それは私たち双方の方位を測定する参照軸になるのではないでしょうか。

高秉權：障害者運動が制度化される危険、つまり上品になれば力がなくなるということは、多く経験してきたことです。韓国の障害者運動が現在生命力を持つ理由は先ほど露天商の話をしましたが、貧しく、学びの機会がなく、「復讐してくれ」という品のない遺言を残した人びとと手を取りあった少数の障害者がいたので、運動が品位の反対側に向かったから可能だったと考えます。二つ目のご発言に対してですが、大事なお話しに感謝申し上げます。韓国でも最初から「移動権」という単語があったわけではありません。国語辞典にもない言葉で、障害者運動が言葉を誕生させたのです。言葉が生まれたということはとても意味あることです。

瀬戸徐：今日の登壇者の方に最後に一言ずつご発言をお願いいたします。

北川：高秉權さんが強調された無感覚なものを感覚するという言葉についてです。ちょうど今翻訳しているパレスチナ支配に関する記事があって、タイトルは「無感性的暴力」です[1]。この概念によると、施設や収容所に押し込んで不可視化したから、その暴力に無感覚になるというだけはありません。それとは逆に、徹底的にすべてが感覚され、可視化されるからこそ、人は無感覚になるというものです。イスラエル側が、パレスチナ人の移動とか電話内容とか、生のすべてを感知するがゆえに無感覚化が進み、簡単に破壊が可能となると。この議論を敷衍して言えば、まるで自動的にモノや情報、人など、いろいろなものがスムーズに動き、まるでそれらすべてをリアルタイムで把握できるかのような現代社会は、本当に無感覚になっていると思います。では、

1 イアン・アラン・ポール、北川眞也 訳「無感性的暴力――パレスチナにおける植民地的取り締まりとアナーキー」以文社ウェブサイト（https://www.ibunsha.co.jp/contents/ianalanpaul02/）

通勤時間デモがこうした円滑な流れを遮断したときに何が起こるのか。すぐさま反動的で暴力的な態度が醸成されてしまう。「迷惑」とか「不快」という言葉もあったかもしれませんが、それこそが障害者差別の感性なわけです。しかし、こうした闘争こそが社会の感性とせめぎ合い、それを変容させてきたことを決して忘れてはなりません。また闘争それ自体が、社会の円滑な流れとは異なったひとつの時空として生成しうるものでしょう。高速に流れ去っていくことのない言葉を紡ぎ出し、それを血肉化していけるような時間と空間、そして情動的回路をどう作っていけるのかを考えさせられました。

渡邉：韓国の障害者運動の主役が交代してきており、新しい声が次々に生まれ、既存の声との関わりが運動において課題だという話に勉強させられました。障害者嫌悪の問題は、SNS の発達という面もありますが、日本でも障害者がレストランに入れなかったとか電車に乗せてもらえないとき、それを差別だと SNS 上などで公表するとたくさんの非難を浴びます。さらに障害者が安楽死に反対しても、徹底的に叩かれます。実際そのバッシングによって声を出しにくくなっており、正直怖いです。大問題です。もう一つ、障害者差別解消法などが運動の力によって成立してきたと思います。バリアフリー等についてはそこそこのものが成立してきている。例えば東京だったら、現在90％以上の駅にエレベーターが設置され、地盤は整ってきています。社会の側にも改善していこうという動きがあるため、闘争というよりも「建設的対話」を重視する方向性に運動は変わってきていると思ってもいます。そういう側面もあるので、元気がないというふうに見えるかも知れないですが、それも一つのあり方かなと感じています。ただ声を上げると叩かれやすいという現状はどうしたらいいんだろうな、と常々思っています。

高秉權：『黙々』から話せることがこんなにあるとは信じられません。渡邉さんのコメントを聞いて、日本で知的障害者の介護サービスが 24 時間保障されているということが羨ましかったんですね。韓国では知的障害者に対する介護サービスは本当に少なくて、多少ある場合でも一カ月に 480 時間なので 24 時間介護にはなりません。2007 年に韓国では介護サービスがつくられたんですが、日本で知的障害者にも 24 時間介護を勝ち取ったということを知らなかったんです。片方が突破できればそれを根拠にもう片方も突破できるんじゃないかと思って、韓国で早くこのことを共有しなければと考えていました。じっさい韓国の問題と日本の問

題、そして障害の問題とパレスチナの問題がこのように翻訳できるということは、わたしたちが直面している問題は思っているよりも異なるものではない、と考えてみました。ただ、あまりに滑らかな言葉や、成功した言葉をわたしは信じません。世界がこのザマなのに、いつも成功するというのは良いことではありません。だからわたしたちがどこで失敗しているのかをぜひ記録するべきだと考えます。今日は皆さまの言葉をちゃんと聞き取ることができず申し訳ありません。招待していただき、良い言葉をいただき感謝申し上げます。